

白居易の落花詩

——和漢朗詠集の部立て「落花」から——

藤井良雄

一 はじめに

四条大納言と称せられた藤原公任(996~1041)が撰した『和漢朗詠集』上下巻の部立ては白氏文集からの影響が大きい。すでに平岡武夫は「春の部」の「三月盡」について、

三月盡はもとより和語ではない。漢詩の詩語である。『千載佳句』は「送春」の部に「四十六時三月盡 送春那得不慙慙」と「恨望慈恩三月盡 紫藤花落鳥關關」と、白居易の二つの詩句を載せている。また『和漢朗詠集』に至っては「三月盡」をもって部立てをしている。そしてそこに漢詩を三例、いずれも白居易の作品を引いている。平安の歌よむ人たちに三月盡の言葉を教え、やよひのつごもりを歌にさせたのは、白居易のようである。彼らは直接に『白氏文集』から、あるいは

は間接に『白氏文集』を引く詞華集から、この題材を汲み上げたようである。いや、正にそうにちがいない。というのは、この言葉、そしてこれを詩に表現する」とは、まさしく白居易の独擅場なのである。

冉冉三月盡 晚鶯聞城上 (南亭對酒送春 889)

送春婦 三月盡日日暮時 (送春婦 592)

恨望慈恩三月盡 紫藤花落鳥關關

(酬元八員外三月三十日慈恩寺 相憶見寄 980)

四十六時三月盡 送春那得不慙慙 (春去 1992)

明朝三月盡 忍不送殘春 (飲散夜歸贈諸客 1365)

今朝三月盡 寂寞春事畢 (三月三十日作 2290)

三月盡時頭白日 與春老別更依依 (柳絮 2337)

五年三月今朝盡 客散筵空獨掩扇

(春盡日宴罷 感事獨吟 3446)

同じく『和漢朗詠集』の「春」に「落花」の部立てがあ

る。金子元臣・江見清風合著『改修版』和漢朗詠集新釋（明治書院1943）には部立て「花 附落花」とあり、「附落花」は「諸写本になし」と注記が著者によってなされている。これは金子元臣所蔵の『和漢朗詠集註』を底本にしたものである。「附落花」と注意を喚起しているが、これは「花」の部が量的に多いのに対しその次の「落花」が見落されないようにとの配慮からだろうか。藤原公任自身が始めから付けていたのかどうか現在では不明であるが、他の書写本になしということは確かめられている。

このように『和漢朗詠集』「春」に立てられている「落花」も白居易の作品の影響からなされた部立てであること論じ、後代まで綿々と続く「落花詩」の淵源が白氏文集にあるのではないかと提起するのが本稿のもくろみである。

二

和漢朗詠集の春の部には「花」の部立てがあり、その題下に他の写本にはないが双行の注で「附落花」と示される。そして「花」部が終わると「落花」の部立てがある。

「落花」部も白居易の次の二聯の対句を引用して始まる。

落花不語空辭樹 落花語らず空しく樹を辞し
流水無心自入池 流水心なく自から池に入る

（過元家履信宅 2759）

朝踏落花相伴出 朝に落花を踏みて相伴うて出
暮隨飛鳥一時歸 暮に飛鳥に随ひて一時に歸る

（春來頻與李二賓客、郭外同遊因贈長句 3253）

とあり、その次に後の江相公（大江音人）と管三品（菅原文時）の二聯とを配し、次の二歌を掲げる。

さくらちる木の下風はさむからで空に知られぬ雪ぞふりける
貫之

とのもりのとものみやつこ心あらばこの春ばかり朝きよめすな
公忠

この第二首目めの菅原文時の和歌は『和漢朗詠集諺解』には「無」と指摘があるので、このような『朗詠集』そのものの問題について今は論ぜず置いておく。

さて、白居易の詩が「落花」の部立てにおかれていることから、白居易の落花を詠ずる詩をそのまま落花詩と呼べるだろうか。「落花」という語を使用した詩が十一詩例もあり、「花落」では「槐花落」二例、「梅花落」一例を除き、「百花落」・「千花落」・「残花落」など含めた晩春のものはおよそ二十例にもなる。落花詩の多さは李白と並んで唐代では双璧であろう。

量的な面ではいうまでもないが、それよりも重要なことは、白居易はまさしく唐代で初めて「落花」という詩題で

作詩している。制作年は明確にできない白詩の一首であるが、おそらく大和三年（829）から大和五年（831）まで、
齢すでに六十、洛陽に帰郷してからの作である。「落花」の詩。

留春春不住 春を留むれども春住まらず

春歸人寂寞 春歸りて人寂寞たり

厭風風不定 風を厭へども風定まらず

風起花蕭索 風起こりて花蕭索たり

既興風前歎 既に風前の歎を興し

重命花下酌 重ねて花下の酌を命ず

勸君管綠醪 君に勸めて綠醪を管めしめ

教人拾紅萼 人をして紅萼を拾はしむ

桃飄火焰焰 桃飄りて火焰焰たり

梨墮雪漠漠 梨墮ちて雪漠漠たり

獨有病眼花 獨り眼花を病む有りのみ

春風吹不落 春風吹き落ちず

行く春を押し止めようとしても留まりはしない、春が去って人もいなくなり寂しいかぎり。花散らす風を嫌うが風は

止みはせぬ、風が吹いてきて花も散り散り。風前の燭の老いの嘆きが興れば、また花のもと花見の酒宴を開かせる。

君には濁り酒を勧め、美女には紅い花びらを拾わせる。紅い桃の花が風に翻って火炎のごとく火焰と燃えるかのよう、散り落ちた梨の花は雪のように廣漠と広がっている。ただ

私のかすみ眼の花霞だけは春風のなかでも吹き落ちないのだ。

ところで、この詩第五句中にみえる「風前歎」は『白氏文集』巻六「歸田三首」之三（246）「沉んや吾行ゆく老いんと欲し 警なること風前の燭の如きをや」の「風前の燭」と同様に残年の短いことを嘆いている。また最終聯の眼花とは、おそらく眼病の白内障のことであり、すでに巻十「別行簡」（462）詩「漠漠として眼花を病み 星星として鬢雪を愁ふ」と詠うようにかすみ眼のこと。

この詩は「落花」という詩題でよる年並みの嘆きを詠じているが、「落花」という詩題が普通に行われていたことを暗示するものである。藤原公任がそれをとりいれたことの可能性が大きいと言わねばならない。実は、この「落花」詩は、すでに、『和漢朗詠集』では部立て「花」より前にある「三月盡」に第一聯「留春春不住 春歸人寂寞」詩題「落花 古調」として採用されており、白居易に「落花」そのものの詩題があることは、公任も承知していたと推定される。

次に大和六年（832）にも五言の「惜落花」（3687）があり、

夜来風雨急 夜来風雨急
復無舊花林 復た舊花林無し
枝上三分落 枝上三分落ち

園中二寸深 園中二寸深し

日斜啼鳥思 日斜めなり啼鳥の思

春盡老人心 春盡く老人の心

怪莫添杯飲 怪しむ莫れ杯飲を添ふるを

情多酒不禁 情多くして酒禁せず

『和漢朗詠集』は、五言詩を殆ど引用しないのであるが、藤原公任は『白氏後集』⁶に載るこの詩も読んだに違いない。

公任は藤原道長と同じく九十六年の生まれであり、良房以来、基経・忠平・実頼・頼忠と五代続いた摂関家・藤原北家の嫡男（小野宮家）であり、円融天皇の天元三年（880）、父・頼忠が関白のとき、臣下でありながら宮中の清涼殿で元服し、正五位を初叙されてから、翌年には従四位、花山天皇の短い二年間の御代では、寛和元年（885）に正四位下を与えられ、翌・寛和二年三月五日には伊予権守を兼ねた（公任二一歳）。このように関白の父のおかげで格別に順調に上ってきたが、十九歳の花山天皇が藤原兼家の陰謀により、突然出家して退位し、一条天皇の外戚である兼家が、幼帝の摂政となり（885）、父の頼忠が関白を退いた。頼忠が没し（885）、姉の遵子が正室であった円融院が崩御した後（891）、後ろ盾が無くなった公任は藤原庶流（師輔の九条家）の兼家・道隆・道長の権勢に圧倒され続けた。官位は長保三年（1001）によりやく左衛門督の正三位となり、自分より年下のものが位階官位が上になるのに

自尊心を傷つけられ、左右衛門督を辞任する上表を提出するが却下され、再度、辞表を提出して寛弘元年（1004）にようやく従二位に叙せられた。寛弘六年（1005）に権大納言となるが、正二位に上るのは『和漢朗詠集』が成立したと推定される長和元年（1012）まで待たねばならなかった。彼は権大納言にとどまった。彼は博学多才で、宮廷儀礼、詩文・和歌、管弦など行くとして可ならざるところ無く、摂関政治全盛期の文化的指導者でありその名声は並ぶものがなかったが、道長らの庶流のため政治の一線から退かざるを得ず失意の人となったのである。『本朝一人一首』を編んだ林鶴峰は、公任の「晴後山川清」詩を引いて

山霽川清景趣幽 山霽れ川清く景趣幽かなり
近望雨脚對東流 近く望めば 雨脚東流に對す
嶺模毛女唯青黛 嶺 毛女を模して唯だ青黛
浪伴漁翁自白頭 浪 漁翁を伴って自から白頭
雲霧籠収松月曙 雲霧籠収まる松月の曙
菰蒲煙卷水風秋 菰蒲煙巻く水風の秋
云仁云智足相樂 仁と云ひ智と云ひ相樂しむに足る
宜矣登臨促勝遊 宜なり 登臨し勝遊を促すことを

林子曰く、公任は清慎公（実頼）の孫にして、廉義公（頼忠）の子なり。實に是れ摂家の正嫡なり。然れども道長の強大を以て執柄に任ずること能はず。寛弘の初め、中納言を以て左衛門督を兼ね。貴族と曰ひ才調

と曰ひ、黄門（中納言）・金吾の官職を屑とせず。故に官仕の勤め稍懈る。此の詩を見れば、則ち目を山水に遊ばしめ、不平の懐ひを遣る乎。二聯稍好し。唯だ末句未だ可ならざることを覓ふ。

公任の「不平」を詩中にも認めている。

さて、白居易が始めて「落花詩」を作ったのも、遡って、江州に左遷されて間もないとき、すでに「惜落花贈 崔二十四」(938)があり、まさに「漠漠紛紛不奈何 狂風急雨兩相和」と詠じていた。大江千里『千載佳句』が転・結句を引用する。

漠漠紛紛不奈何 漠漠紛紛として奈何ともせざらん
狂風急雨兩相和 狂風 急雨 両つながら相和す
晚來悵望君知否 晚來 悵望 君知るや否や
枝上希疎地上多 枝上希疎にして地上多し。

花びらが地上に敷き詰まるほど紛紛と散り敷くのは止めようもなく、風と雨とが一緒に荒れ狂ったのだから。この夕暮れ時、私が悲しい気持ちで落花を眺めていたのを君は分かってくれるだろうか。樹の枝には花少なくなり、地上に沢山散ってしまったから。

眼前の落花の光景が江州司馬に貶謫された失意の白居易にいやがおうにも悲しみをもたらしたのである。その心情をこの落花を惜しむ余情として詠じた。

このような落花の歌い方は、公任のモットーである余情

を大切にする歌論と合い相うもので、公任は『新撰髓脳』『九品和歌』の歌論書のなかで

凡、歌は心ふかく姿きよげにて、心におかしき所あるを、すぐれたりといふべし。…心すがたあひすぐる事かたくば、まづ心をとるべし。(新撰髓脳)

言葉たへにして、あまりに心さへあるなり。(九品和歌、上品上)

と、述べているように、「余りの心」余情の美を最高のものとしている。

ところで、太田青丘の『日本歌学と中国詩学』によれば、中国詩論からの公任らへの影響について

詩論に於ける余情論は、『詩品』の「夫れ四言、文約まりて意広し」(上品・序)「文已に盡きて意餘り有り」(上品・序)や『文心雕龍』の「物色は繁しと雖も、而れども辞を析つはを簡を尚ぶ。味をして飄飄として軽く挙らしめ、情をして曄曄として更に新たならしむ。……物色盡きて情餘り有る者は、會通を曉れるなり」(物色篇)「辭約にして旨は豊かに、事は近くして喻は遠し。是を以て往者は舊しと雖も、餘味は日々新たなり」(宗經篇)「隠なる者は文外の重旨なる者なり。秀は篇中の獨技なる者なり。隠は複意を以て工と為し、秀は卓絶を以て巧と為す」(隱秀篇)、空海の『文鏡秘府論』の「思ひを落句に含む勢とは、落句に至る毎に、

常に須く思ひを含むべし、語をして盡き思ひをして窮
まらしむるを得ず。或いは深意、愁いに堪へ、具さに
説くべからざれば……」（地巻、十七勢「王氏論文」
即ち王昌齡『詩格』よりの引用かと認めらるる）等にか
なり明瞭に表れてをり、是等は忠岑の余情体、公任の
あまりの心を暗示するものがあつたと思われる。

と指摘があるのを参照すれば、『和漢朗詠集』「落花」にま
ず最初に引用される白居易の落花詩が、自分より八歳も若
い友・元稹が逝去して主のいない洛陽の履信坊にある元稹
の旧宅を訪れたときの「前庭後院 傷心の事 唯だ是れ春
風秋月のみ知る」（過元家履宅）と結ばれる詩が「卓絶」
の詩となつてゐることが分かる。

鶏犬喪家分散後 鶏犬喪家分散して後

林園失主寂寥時 林園主を失ひ寂寥なる時

落花不語空辞樹 落花語らず空しく樹を辞し

流水無情自入池 流水無情自から池に入る

風蕩燕船初破漏 風燕船を蕩して初めて漏破り

雨淋歌閣欲傾欹 雨歌閣を淋し欹を傾けんと欲す

前庭後院傷心事 前庭後院 傷心の事

唯是春風秋月知 唯だ是れ春風秋月のみ知る

（過元家履宅 279B）

公任が『和漢朗詠集』を編集したのは長和元年（1012）
のこととされ、以上の考察によって、公任が「落花」の部

立てを決めたのは、やはり「三月盡」と同じく白居易の落
花詩の直接的影響なのである。

三

では、「落花」という詩題は唐詩において、いつの時代
の詩人たちから注意を向けられ始めたのであろうか。合山
究氏は「歸莊における看花への執念——『尋花日記』制作
の経緯——」という論文の中で

落花詩、「看花」、「惜花」などと並んで、時おり用い
られる詠歌題として昔から存在するが、古くは宋初の
宋庠・宋祁の兄弟が、落花詩の作者として知られ、
『召溪漁隱叢話』卷二十・『詩人玉屑』卷七・『青細雜
記』・『庚細詩話』卷下などの宋代の諸書に引かれてい
る。しかし、明代中期までは、格別とりたてて言うこ
ともない平凡な詩題にすぎなかった。

と述べられているが、上に述べた『和漢朗詠集』の「落花」
の部立てが、白楽天の落花詩によつてゐることからでも理
解できるように、「落花」はその詩題成立から、決して
「格別とりたてて言うこともない平凡な詩題」ではないと
思われる。

ところで、唐宋詞（花間集）研究を主とされる青山宏氏
は「中国の詩歌における落花と傷惜春」という論文のなか
で、中国詩の中での「落花」を追跡されており、概説史と

して参考でき、落花詩の成立を考察する上で大いに助けとなるので、盛唐のところを引用する。

では盛唐はどうであろうか。まず王維の詩に目を向けると

落花啼鳥紛紛乱 落花啼鳥紛紛として乱れ

澗戸山窓寂寂閑 澗戸山窓寂寂として閑なり

(寄崇覺僧 王右丞集箋注卷六)

興闌啼鳥緩 興闌にして啼鳥緩か(ママ)

坐久落花多 坐すること久しくして落花多し

(從岐王過楊氏別業応教全卷七)

落花家童未掃 落花家童未だ掃かず

鶯啼山客猶眠 鶯啼き山客猶ほ眠る (田園樂 全卷十四)

……等をはじめとして、多くの作品に落花に類する語が出てくる。しかし、王維の詩にあっては深い自然観照に支えられた景の客観的描写の対象として落花があり、そこには傷春・惜春と結びつく哀嘆はいささかも語られていない。

劉長卿 (?709-785?) の場合も、

花雨晴天落 花の雨晴天より落ち

松風終日來 松風終日來る

(集梁耿開元壽所居院)

對酒春日長 酒に對せば春日長く

山村杏花落 山村杏花落つ

(題王少府堯山隱處簡陸八陽)

細雨濕衣看不見 細雨衣を濕し看れども見えず

閑花落地聽無聲 閑花地に落ち聴けども聲無し

(別巖士元)

の句のごときをはじめとして、いずれも王維とあまり変わるところがない。孟浩然には人口に膾炙した「春暁」の詩があり、「夜來風雨聲 花落知多少」と歌うが、逝く春を惜しむ哀嘆の情は言葉の奥深くに隠されていて、表面に明らかな姿を現すに至っていない。

李白の詩にも多数の落花にかかわる語を見るが、状況はやはりあまり変わるところがない。と言うよりは、

むしろ落花を飲ぶむきささえうかがえる。たとえば、

瑤台雪花數千点 瑤台に雪花數千点

片片吹落春風香 片片と吹き落ちて春風香る

(酬殷明左見五雲)

好鳥吟清風 好鳥清風に吟じ

落花散如錦 落花散じて錦の如し

(月下独酌其の三)

山鳥下廳事 山鳥廳事に下り

簷花落酒中 簷花酒中に落つ

(贈崔秋蒲其一)

落花踏盡遊何處 落花踏み盡して何れの處にか遊ぶ

笑入胡姬酒肆中 笑ひて入る 胡姬酒肆の中

(少年行其の一)

細雨春風花落時 細雨春風花落つる時
揮鞭直就胡姬飲 鞭を揮いて直ちに胡姬に就いて飲む

(白鼻蝸)

……がそれである。哀嘆を表明したものととしては、三

十数例中わずかに「憶舊遊」(舊遊を憶う)の詩の

問余別恨知多少 余に問う 別恨知んぬ多少ぞ

落花春暮争紛紛 落花春の暮に争うて紛紛たり

の句と「落日憶山中」(落日に山中を憶う)の詩の

花落時欲暮 花落ち時に暮れんと欲す

見此令人嗟 此を見れば 人をして嗟かしむ

の句があるのみである。前者は別恨の多きを落花の頻

りなるになぞらえたもので、傷春の情が同時に語られ

ているが、後者はただ一日の暮れゆくを傷んでいるに

すぎない。

李白と並ぶ一方の雄、杜甫の場合はどうかと言うと、

「曲江其二」の詩に

一片花落減却春 一片花落ちて春を減却し

風飄萬點正愁人 風萬點を飄わし正に人を愁えしむ

の句があつて、落花と傷春とを見事に歌つたものとし

てよく人口に膾炙している。その他の二十数例に及ぶ

落花またはそれに類する語は「可惜」(惜しむべし)

の詩の

花飛有底急 花飛ぶこと底の急ぐ有る

老去願春遲 老い去つては春の遅きを願う

「逼仄行贈畢曜」(逼仄行 畢曜に贈る)の詩の

辛夷始花亦已落 辛夷始めて花ひらき 亦た已に落ち

況我與子非壯年 況んや我と子と壯年に非ざるおや

の例を除いては、単に春の情景あるいはただ時の推移

変化を示すのみで、傷惜春の情は歌われていない。

「曲江對酒」(曲江にて酒に對す)の詩の

桃花細逐楊花落 桃花細かに楊花の落つるを逐い

鳥時兼白鳥飛 黃鳥時に白鳥の飛ぶを兼ね (曲江對酒)

「寒食」の詩の

寒食江村路 寒食江村の路

風花高下飛 風花高下して飛ぶ (寒食)

「晴其二」(晴れ其の一)

竟日鶯相和 竟日鶯相ひし和し

摩宵鶴數聲 宵を摩して鶴數聲

野花乾更落 野花乾き更に落ち

風處急紛紛 風ふく處急に紛紛たり (晴其二)

などはただ景として言つたものであるし、「遣意其二」

(意を遣其の一)の詩の

一徑野花落 一徑野花落ち

孤村春水生 孤村春水生ず

「城上」詩の

風吹花片片 風吹いて花片片たり
春動水茫茫 春動きて水茫茫たり

(城上)

は、ただ時の推移変化を述べたものである。もっとも「逼仄行贈畢曜」詩の句も時の容赦なく流れ去り、人生の盛りも過ぎたことへの嘆きを歌ったもので、必ずしも傷惜春と直接結びついているわけではない。他の盛唐詩人の場合もおおむね同様で、

この期全体としては初唐とあまり変わるところがないと言える。

しかし、時代の不安を鋭敏に読みとった杜甫が、一片の落花に春の減却を感じとったことは大変象徴的であるとともに、ここに本格的な落花と傷惜春の結合が初めて誕生したのである。その意味では南朝の梁詩に見た落花と傷惜春の結合よりも重要な位置を占めていると言ふことができる。

以上、原詩を理解しやすくするため地の文から引き抜いたため、長い引用になったが、杜甫の落花を詠じ込んだ詩が、後の落花詩に対し新しい心情を添え歌い込む詩法としての影響があるとみてよいだろう。さらに指摘できるのは、上記の詩例にはないが「風雨看舟前落花戲為新句」のように詩題中に「落花」と入ってくることである。白楽天以後、「中唐以降になると詩題中に送春、暮春、晩春、遺春、惜

花、落花、花落……といった語がしばしば現れ、晩唐になるとこの傾向は一段と強まる」と青山氏も指摘されるが、そのことは晩唐の代表的詩人である李商隱(813-785)や杜牧(803-852)の作品中に検証されるとおりである。

さて論者の調査によれば、晩春の景として、李白の詩には「落花」の用例が計二詩例、「花落」の用例が一〇筆も列挙でき、杜甫では「落花」が三筆、「花落」九筆の用例が挙げられる。王維は「落花」が六例、「花落」一例あり、上の引用中に用例があげられていない岑参は「落花」が三例、「花落」も五例もあげられる。盛唐における落花を詠じる詩は、落花詩の成立の背景となっているであろうし、その表現は典拠として後世の詩人にも受け継がれている。岑参の「青門歌送東臺張判官」詩の

羈頭落花没馬蹄 羈頭の落花 馬蹄に没み

昨夜微雨花成泥 昨夜の微雨 花 泥となる

この聯の落花の表現が明末の歸莊の「落花詩十二章」連作中の第七首中の

化作春泥亦已矣 化春泥となりて亦た已みなん矣

不堪墮在馬蹄岑 墮ちて馬蹄の岑に在るに堪えず

となり、連作中で落花を詠ずることの多い清末の龍自珍の

「己亥雜詩」其の二の

落紅不是無情物 落紅はれ情無き物にあらず

化作春泥更護花 化して春泥となりて更に花を護る

の表現に結実する。

また李嘉祐(？-779?)の「聞逝者自驚」詩の

黄卷清琴總為累 黄卷清琴總べて累となり

落花流水共添悲 落花流水共に悲みを添ふ

が、白詩においては、公任が「落花」に先ず引用した

「落花不語空辭樹 流水無心自入池」のように「落花流水」

を分け対句に仕立てるのに使われた。そして晩唐の趙嘏

(810-856)の「寄遠」詩の

無限春愁莫相問 無限の春愁 相い問う莫れ

落花流水洞房深 落花流水洞房深し

の「落花流水」と引き継がれる。この「落花流水」の詩語

のもつ詩境は、おのずと李白の「桃花流水宛然去 別有天

地非人間」とは異なるものとなっている。

四

前章では盛唐の大詩人たちの落花を詠ずる詩が落花詩成

立前夜を形成していたことを述べたが、宋代の詩話の中で

それを暗示する指摘があるので次に引用する。合山氏が列

挙された落花に関する記事を掲載する詩話類は、すべて宋

初の「二宋」の文名で有名な宋庠(996-1066)と宋祁

(998-1061)の兄弟の落花詩についてのものである。なか

でも弟の宋祁は官位が工部尚書に上っているので、彼の

「玉楼春」詞中の「紅杏枝頭春意鬧」の名句があることか

ら、紅杏尚書と呼ばれたという。『召溪漁隱叢話』巻二十
には「宋祁」の項があり、

召溪漁隱曰く、夏文莊、安州に守たりしとき、呂公兄

弟尚は布衣に在り、文莊、異として之を待し、命じて

落花詩を作らしむ。呂公(宋庠)の一聯云う、

漢臯佩冷臨江失 漢臯の佩冷く江に臨んで失ひ

金谷楼危到地春 金谷の楼危く到地春なり

子京(宋祁)の一聯いふ、

將飛更作廻風舞 將に飛ばんとして更に作す廻風の舞

已落猶成半面牀 已に落ちて猶ほ成す半面の妝

余、『南史』を觀るに、「宋の元帝妃・徐氏は容質無く、

帝に禮せられず、帝眇め一目すれば、帝の將に至らん

ことを知り、必ず半面の妝を為して之を俟つ」と。此、

半面の妝の従りて出づる所なり。若し「廻風舞」に出

處無ければ、則ち對偶偏枯にして、佳句為らず。殊に

知らざらんや、乃ち李賀(791-833)の「残絲曲」

花臺欲暮春辭去 花臺暮れんと欲して春辭し去り

落花起作廻風舞 落花起ちて作す 廻風の舞

前輩の用事、必ず來處有り、又精確なること此くの如

し、誠に法とすべきなり。

このように二宋の落花詩について論評しているが、ここ
にはすでに「落花詩」と呼ばれている。また『詩人玉屑』
巻七が引用する「三山老人語錄」にも、

余襄公（靖・安道1000-1064）に落花詩ありて云う

金谷已空新步障 金谷已に空し 新步障

馬嵬徒見舊香囊 馬嵬徒らに見ゆ 舊香囊

二宋に亞ぐべし。

とあり、落花詩がすでに固定した詩題となっていたことが判明する。

だとすれば、落花詩の起源は唐詩に求められるであろう。

また、その裏付けともいえる詩話が伝わる。宋時代の朱熹や張南軒が尊敬した曾季狸の「詩話中の秘籍」とされる『艇齋詩話』に、

前人の詩、落花を言ひ、思致あるもの三。王維の（從岐王過楊氏別業）教『王右丞集箋注』卷七）

興闌啼鳥緩 興闌きて啼鳥換わり

坐久落花多 坐すること久しくして落花多し

（從岐王過楊氏別業）教『王右丞集箋注』卷七）

李嘉祐の（別巖土元）

細雨濕衣看不見 細雨衣を濕し看れども見えず

閑花落地聽無聲 閑花地に落ち聴けども聲無し

荆公（王安石1021-1086『臨川先生文集』卷二十八・

七絶）の

細數落花因坐久 細かに落花を數へて坐に因ること久しく
緩尋芳草得歸遲 緩かに芳草を尋ねて歸り得ること遅し

（北山）

と、珠玉の落花詩を三首列挙している。盛唐の王維の詩は「応教」（天子に和するものが応詔、諸王に對しては応教という）の詩ではあるが、全詩を次に掲げる。

楊子談經處 楊子經を談ずる處

淮王載酒過 淮王載酒して過ぎる

興闌啼鳥緩 興闌きて啼鳥換わり

坐久落花多 坐すること久しくして落花多し

逕轉迴銀燭 逕轉じて銀燭を迴らし

林開散玉珂 林開きて玉珂散ず

巖城時未啓 巖城 時未だ啓かず

前路擁笙歌 前路 笙歌を擁す

この詩は、酒興が尽きたのち、ふと鳥の鳴く音が換わり落花が多く地に降り敷いて長く坐したままであったことに気がついた落花の点景である。王維には「落花」の詩詞を使った例がこれ以外に五例見うけられるが、すべて春の情景である。

人間桂花落 夜靜春山空

（鳥鳴磬）

深上人家凡幾家 落花半落東流水

（寒食城東即事）

秋歸覆釜春不還 落花啼鳥紛紛亂

（崇梵寺近東阿覆釜村）

鵲乳先春草 鶯啼過落花

（晚春嚴少尹與諸見過）

落花寂寂啼山鳥 楊柳青青渡水人

（寒食汜上作）

若道春風不解春 何因吹送落花來

（戲題盤石）

しかし、王維の詩題中に「落花」の使用例はなく、盛唐

では、管見の及ぶところ、杜甫の「風雨看舟前落花戲為新詩句」にみえる数少ない一例があると上述したとおりである。ただ盛唐詩では、杜甫の「醉時歌」をはじめとして李白など多くの盛唐詩人の「飲酒」「對酒」等の酒の詩中に落花が多々詠じられている。

また、曾季狸の『艇齋詩話』には、唐詩の落花詩の佳篇として李嘉祐の「別巖土元」詩を挙げているが、この詩は青山氏もすでに劉長卿の詩として引用されて、「(劉長卿)いづれも王維とあまり変わるところがない」と述べたもので、全詩に涉って関すると、

春風倚櫂闌闌城

水國春寒陰復晴

細雨濕衣看不見

閑花落地聽無聲

日斜江上孤帆影

草綠湖南萬里情

君去若逢相識問

青袍今已誤儒生

この詩、作者はともかく、送別の詩であり、離郷の悲哀

のなかで哀感をそそるものであり、「閑花」が音もなく散っているさまが聴覚的に捉えられているのは、これまで晩春の背景として詠じられた視覚的な落花とは異なるのではないか。

以上のごとく、宋の詩話でも落花詩を盛唐詩のなかから引用して論じたことが判明する。

五 むすび

盛唐詩以後も「中唐に入っても落花を春の美景・好景の一つとして捉える傾向はなお依然として存続する」¹⁾であるが、本論文の結論として指摘できるのは、詩題中に端的に「落花」として落花詩成立を決定づけたのが白居易であること。同時代の韓愈にも「遊城南十六首落花」、元稹にも「江花落」「桐花落」など詩題中に「落花」の文字が現れてくるのであり、藤原公任からも落花詩の作の非常に多い白居易の「落花」はまさにその典型的詩題となりえたのである。『和漢朗詠集』『無常』に収載される「年年歲歲花相似 歲歲年年人不同」(宋之問「代白頭吟」ママ)を踏まえて

昔見し花の年々似たれども同じからむを思い知らなむ
〔公任集〕

と、当意即妙に返歌する公任であればこそ、『白氏文集』から部立てとして「落花」を引き立てるのに不思議はなかった。

かくて晩唐では詩題中、李商隱「落花」²⁾「和張秀才落花有感」をはじめとして杜牧の「和嚴憚秀才落花」・韓偓(844-933?)「落花」(全唐詩は「惜花」)など出現し、落花

詩が定立する。

注

- (1) 藤原公任については、村瀬敏夫「藤原公任の研究」、『平安朝歌人の研究』新典社 平成六年)・小町谷照彦「余情美をうたう 藤原公任」(集英社版「王朝の歌人」一九八五年)を参考にした。
- (2) 和漢朗詠集については、山田孝雄「倭漢朗詠集」(岩波講座 日本文学 昭和七年)・金子元臣・江見清風「和漢朗詠集新釈」(明治書院 昭和十八年)・『和漢朗詠集私注』(新典社 三木雅博『和漢朗詠集とその享受』(勉誠社 平成七年)等を参考にした。
- (3) 平岡武夫『白居易——生涯と歳時記』「第四部：白氏歳時記 三 月盡」(朋友書店 一九九八年)
- (4) 「落花」部立てについては、三木雅博『和漢朗詠集とその享受』に「落花」は『古今集』や『後撰集』の春部の花の歌群中に『散る花』の歌群が設けられており、また平安漢詩の詩題の中にも多く登場するので、これらを踏まえて置かれたものではないか。』(四七頁)と記述がある。
- (5) 拙論「白楽天の牡丹詩」(『福岡教育大学国語科研究論集』第35号 1984)においては、牡丹を詠じた詩を「諷諭・閑適・感傷・雑律」にわたるものを総称して牡丹詩とみなし、白居易の「牡丹詩」によってそのジャンルが定立したことを論証し、彼の牡丹詩は元稹と白居易の在京時代の友情の象徴であることを指摘する。
- (6) 『白氏文集』は巻五十一以降、日本では『白氏後集』として行われていた。
- (7) 『千載佳句』は金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集』に拠る。
- (8) 太田青丘『日本歌学と中国詩学』(弘文堂 1968)
- (9) 壬生忠岑、九〇五年(延喜五)撰進の「古今和歌集」の撰者に抜擢された。同集に三十首の多数の作品を採られた。『和歌体十首』は歌論として有名で、「忠岑十体の余情体の説明には、『是体 詞標一片、義籠万端』と見えているので、公任はこれらに得るところであったであろう」(前注書一〇五頁)。
- (10) 合山究「歸荘における看花への執念——『尋花日記』制作の経緯——」(『日本中国学会報』第三四集 1982)
- (11) 青山宏「中国詩歌における落花と傷惜春」、『漢学研究』第十三・十四合併号・日本大学中国文学会 昭和五〇年。のち『唐宋詞研究』汲古書院・平成三年に収載。
- (12) 范晞文『對牀夜話』に「好句得易く、好聯得難し。池塘生春草の類の如きは是也。唐人の天勢固平野 河流入斷山。…。興闌啼鳥換 坐久落花多。…。下句皆上に勝る。」(卷三)とあるので、宋代のテキストは「換」が正しい。
- (13) 青山宏「中国詩歌における落花と傷惜春」(同上)(11)
- (14) 李商隱「落花」「高閣客竟去 小園花乱飛 參差連曲陌 迢遞送斜暉 腸斷未忍掃 眼穿仍欲歸 芳心向春盡 所得是沾衣」
- (15) 杜牧「和嚴憚秀才落花」「共惜流年留不得 且環流水醉流杯 無情紅艷 不恨凋零却恨開」

(16) 范晞文『對牀夜話』卷三下「韓渥落花詩」とある。「落花」「皺白
 離情高處切 膩紅愁態靜中深 眼隨片片沿流去 恨滿枝枝被雨
 淋 總得蒼蒼猶慰意 若教泥污更傷心 臨階一饑悲春酒 明日池
 塘是綠陰」。

*白居易からの引用詩の題下の数字は平岡武夫・今井清編『白氏文集歌
 詩索引』の作品番号である。

*本論脱稿後、刊行されて間もない菅野禮行校注『和漢朗詠集』(新編
 日本古典文全集・小学館 1986・10・28)を購入することができた。

その序説ともいえる「古典への招待」において、『落花』の部立てに
 属する「白居易の作品に言及されているが、拙論の「落花」部立てが
 白詩に拠るといふ指摘はなされていない。

*尚、藤原公任や『和漢朗詠集』について、ご教示くださり、上記の注
 (1)の『平安朝歌人の研究』・『余情美をうたう 藤原公任』や注(2)
 の『和漢朗詠集とその享受』を貸して下さった本学の工藤重矩博士
 に感謝申し上げます。

(ふじい よしお・本学教授)

「白居易の落花詩」正誤表

誤	正
@ 6 2 1°-2°下段	
4行目：大江音人	→ 大江朝綱
1 2行：菅原文時	→ 源 公忠
@ 6 3 ページ上段	
1 5行：独り眼花を病む有りのみ	→ 獨だ眼花を病む有るのみ
@ 6 4 ページ下段	
1行目：左右衛門督	→ 左衛門督
@ 6 5 ページ上段	
9行目：大江千里『千載佳句』	→ 大江維時『千載佳句』
@ 6 5 ページ下段	
6行目：あまりに心	→ あまりの心